

潮出版社

10

平林たい子全集

平林たい子全集 10

昭和54年5月10日 印刷

昭和54年5月25日 発行

著者・平 林 たい 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・富 岡 勇 吉

発行所・株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋3-1-3

電話 東京(03)230-0741(販売部)

230-0781(編集部)

郵便番号 102

振替 東京5-61090

© 1979 Shinko Teshirogi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

目次

林芙美子

.....

9

宮本百合子

.....

89

自伝的交友録・実感的作家論

.....

147

二人の里村欣三

149

青野季古論

216

真杉静枝さんと私

157

宮本百合子論

220

林房雄さんと私

165

宇野千代論

225

葉山嘉樹の想い出

175

中島健蔵論

229

前田河広一郎氏と私

181

幸田文論

233

大田洋子さんと私

186

三島由紀夫論

237

鈴木茂三郎さんと私

193

高見順論

240

神近市子さんと私

198

石川達三論

244

伊藤好道さんと私

206

広津和郎論

247

波多野勤子さんと私

210

文芸時評・書評

251

女流文士について、その他

253

「魔子」そのほか

286

プロレタリア文学運動の一年間

256

文芸時評―四ツの小説―

291

文芸方面における婦人最近の活

コロンタイ女史の『赤い恋』

躍

262

について

292

九月のプロ小説

267

今野氏の『汽笛』

294

文芸時評

271

『巷の断層』鈴木清次郎作

295

文芸時感

275

婦人と戦争

296

文芸時評

279

文学雑感

301

婦人作家よ、娼婦よ

303

探偵小説漫談

308

悪口種々

304

林房雄氏の「転形」

310

同性作家への警告その他

305

女流作家月旦

312

プロレタリアリズムと関連

して 314

常に用意せよ！ 317

三四の女流作家について 320

作家の覚え書(一) 323

作家の覚え書(二) 325

葉山嘉樹論 328

世評と彼女 329

小説の中の論理的要素 331

林房雄氏 333

樋口一葉論 334

今東光 350

女性のプロレタリア作家の分野 351

断想 352

文芸戦線脱退について 353

プロレタリア作品の類型化に

ついて 356

エロチック文学について 364

中条さんのこと 365

ブル文学の焦躁と動揺と

プロ文学の自己批判 367

「唯物弁証法的方法」という言葉 368

戦争文学に就て 370

ゾラ・ゴーゴリ 372

プロレタリア文学こそ 373

反動期の作品 374

メリメの小説 376

題材断片 378

処女作の頃 381

ジョルジュ・サンドについて 382

林さんの提唱について 384

葉山さんの人と小説 385

傍観者の愚痴 387

自由主義作家に対する感想 388

現代の英雄 391

長篇小説二つ 392

芸術と風俗 393

長篇と短篇 395

性格の森 396

短歌雑感 398

平林たい子全集

10

林芙美子

林芙美子

私は彼女の晩年をかたるのに適任者ではない。が、若い頃ことは、割によく知っている方であろう。特に、いまだあまり語られなかったお母さんとの奇蹟としかいえないかたい結びつきを目のあたり見たし、彼女からもきいたそのお母さんこそ、芙美子さんの生涯に決定的な影響を与えた彼女の原型である。私ははじめに先ずお母さんのことから語りはじめたい。

彼女のお母さんはキクといった。彼女とお母さんとは、まるで同じ人間のように体の形がよく似ていて、そっくりな顔をしていた。

芙美子さんの生涯で彼女に涙を流させた男性の誰彼は、すぎ去ると、淡い幻が空をよぎったように案外儚く影を消してしまったのに、近くに居ても遠い所にいても、彼女とお母さんとは、愛情というよりもとつよい粘着力で密着し合っていた。それは母子の情の一とおりを越えて、一つの体と心を半分ずつ分け合ったシャム双生児のように血の通ったものに見えた。

昭和に改元したての頃、彼女がお母さんに五十銭送金したことがある。それを見て私はその関係の痛切さに涙が出

て仕方がなかった。

当時の五十銭はいまの二、三百円位にでも当るだろうか。いずれにしても送金したりされたりして役に立つ金ではなかった。多分、そんな額の金キクさんの方からくることもあって、親子は、北九州か四国あたりと東京とで、金高にかかわりなく、お互いの心を復唱し合っていたのである。とても親子の情といったなま温いものではない。その執着しかたも、男性のそれに対してよりも命懸けだとさえいえた。

このつながりがあれば夫婦の情などとても入り込む余地はない。二人のくらしぐりを目のあたりに見ていないので、お母さんの性格はそれ以上は打明け話や想像、推定にたよる他ないが、このキクさんから世わたり、愛欲のすべてに仔獸が親獸から教わるようにどんなに影響されたか、手にとるようにわかる。

たとえば、わずか尋常六年生だった芙美子さんと中学生の岡野軍一少年との間は、そばにいたお母さんの介ぞえなしには考えられない。キクさんに限ってそれは打算ばかりの婚略ではない。娘に幸福な結婚をさせたいということもだが、お母さんは、芙美子さんの心と体で自分の若い頃のちぐはぐだった夢や野心の舞いのつづきを舞い足そうとしたのではないか。それは芙美子さんのお母さんというよりも、お母さんの芙美子さんと言った方が当たっている程、芙美子さんはお母さんの部分だった。よく口諍いをする方だ

ったが、それをしない夫婦よりも深い夫婦のようなものだった。(年齢のことは別にあとでしるすつもりであるが、当時美美子さんは六年生だったが、実際は二歳だけ同級生より多かったから、恋愛も早かったのである)

性格、考え方ばかりか顔や姿すら、さつきしるしたとおりの美美子さんはキクさん似である。若い時役者をしたことのある実父宮田麻太郎に抱かれて撮った写真がある。が、せいぜい目つきと額位しか似ていない。それにくらべるとお母さんは、丸い肩といい、特徴のある鼻の形といい、仔山羊のような背丈といい、美美子さんをさらにきゃしゃにした美美子さんである。背丈の高くない可憐な体に、阿波縮のたてしほのあっぱっぱをきて、年はとっても大根みたいに緻密に光る腕で団扇を使っている柳のようにゆらぐ姿など、ふるいつきたい風情だった。俗にいう男好きのする秘密がいつまでもその体には宿っているように見えた。その上、彼女自身は男性の魅力には殆ど無抵抗で寛大きわまらない愛情を湛えていた。

このひと程、男性のよさを深く知ってその海に溺れた女はあるまい。その点では、美美子さんの方は求めすぎたわけでもないけれども、いつも空しいものを握らされて地団駄をふんだ。そして結局飢えたまま世を去った。

美美子さんはよく、家のもと紅屋だったと言っていた。母のキクさんの従弟小次郎さんの夫人もそれを言っている。

れた。本来の紅は、暖地に育つ紅花からとる高貴なものだが、のちに鹿児島で紅屋というのは薬屋のことだったそう。漢方だったに違いない。その高貴業の時代からこの店はつづいて来たのである。

紅屋の林家が桜島に移ったのは、大正になってからである。キクさんの弟の久吉が、店を出て桜島で温泉付貸間をはじめた。尚キクさんの家系を詳しくしるせば、父林新左衛門と妻フユとの間に、キクさん、明治元年生れがあり、次が長男久吉、明治三年生れで、これは、誰かがかいていたような養子ではなく、夫婦の間の嫡出子である。次に三女鶴がある。鶴は次女の筈だが三女という以上、他に次女がある筈だ。が、昔の壬申戸籍から新戸籍に移すとき、すでに死んでいたからのせなかつたのではないかと、昔戸籍係だった人が教えてくれた。そうした理由で、その人が女だったという以外はわからない。

その三女鶴に、私は鹿児島で逢った。美美子さんをあずかったことのある人である。そのとき、キクさんは、美美子さんに荷札をつけて、門司から鹿児島まで送って来た、と語った。キクさんらしい放れわざである。

親思いの小さい美美子さんが、万事心得て、靴か何かを肩に、ふろしき包みをもってひたすら面持で窓外を見ている荷札姿が目につく。お母さんのためなら、その位の苦労は早くから覚悟していたにちがいない。

鶴はもう随分な歳だと見えて、記憶が少しもうろうとし

ていた。しかし、顔の肌がつるつるするほど光って、若々しかった。

彼女は、大正何年といったことははっきりせず、しきりに桜島大噴火の年を考え出そうとした。その年に美美子さんが来たのである。

さて、今では桜島の貸間のあったその場所は、海水に没して、握り拳大の石の累積が、澄んだ波のまにまに透けて見えるだけである。

私はそぞろにその海岸を歩んでみて、昔の人が人生の有為転変に嘆息した心がわかるような気がした。貧に苦しみ、放浪をうたい、恋に身悶えながら、芸術の花を咲かせた彼女は一瞬にこの世を去って、魂だけがこのあたりの波音に詩の心をたゆたわせているのではあるまいか。

かえりみると、がいがいたる噴火山の荒肌に夕陽がガラスのように映えて、噴煙はピンクの空に乱れた黒髪みたいだった。

桜島は火山のふもとでありながら、温泉の量は少ない。一つのホテルのまわりに温泉つきの貸間が少しあるだけである。その温泉に向いて、美美子さんの詩碑が立っていたが、今更らしくてもおむきに乏しかった。

桜島が観光地になって、フェリーボートが頻繁に往復するようになったのは、さして古いことではない。渡船の回数が少なかった頃、キクさんは、頭にのせて色々な品物を

行商していた。あの柔軟な腰の形は、頭の重味で体の均衡をとったところから来ているのかも知れない。

この生々しい火山岩のむら雲みたいながいがる岩の堆積は、誰にとっても何かの記憶のかたみにならずにはおかないが、この悪魔のような岩を背景に、よく鳴る楽器のような女をおもちゃにして孕ませたまま去った男は、特にいつまでもその記憶を払い落すために苦労したのであろう。キクさんにとっても勿論島は忘れられない生活と愛情とのたたかいの墓場だった。

キクさんは、はじめから弟と一緒にこの島に移って来たわけではない。久吉が島に来た頃も、キクさんのお父さんの亡新左衛門の妻は、鹿児島市にいて或いは、紅屋をつづけていた。キクさんもそこにいたのかも知れないが、きまつて居つづけたとは思われない事情があった。

というのは、彼女は、美美子さんの生れる五年まえに、某女を私生児として産んでいるのである。すでに、戸籍簿が桜島に移ったので、桜島の役所に私生児の出生は届け出られた。けれども、実際に生れた所はどこかわからないし、父親が誰だか、知っている人は少なくとも公にはない。駐在巡査の子だという説もあるがあてにならない。のちに、この娘は、某所に貰われて平穩な生涯を送った。貰った父親の名ははっきりしているのに、実父の名が相変らず不明な所を見ると、その貰った人が実の父親だったとは思われない。生ませた人が認知しないため実父は不明なままであ

る。

というわけで、キクさんを鹿児島市から桜島に駆り立てたのは、一人の私生児をうんでいるという不始末からであったと一応考える他ない。他の仮説によれば私生児は二人だけではないから、問題は變つてくるけれども。キクさんは、人情の固くるしい鹿児島でこういうことを起したのであるから、世間の指弾は一入だったろうと思う。しかしもし、一人の私生児の母親であつても結婚してくれる人があつたら、あとのことは起らなかったと常識的には思われる。キクさんが格別淫蕩な女でない限りは。日本の「緋文字」が結局美美子を生ませたという逆説も成り立つ。が、林家の人々は、母子と似て涙もろい人達だったかも知れない。私生児が二人も入っている戸籍はめつたにないものだが、家長の弟がそれをゆるしたのである。

この頃桜島と鹿児島とは交通上今よりずっと離れた島であつたから、前にしるしたとおり行商はよい商売であつた。彼女はこで行商していたが、しばらくしていなくなつた。というのは、二人目の父なし児をまた身籠つたからだつた。それが温泉貸間に來ていて知合つた宮田麻太郎の子であるとかいてあつたのを見たが、或いは麻太郎は來たのかも知れない。或いは來なかつたかも知れない。行商は移動的な商売である上に、キクさんは放浪癖のある人だったから、このことでは辿りようがない。

それはさておき、美美子さん自身も若い頃、お母さんは、

他にも私生児をうんだような話をして人をおどろかせた。新潮社の調査にもそれに似たことがしるしてある。今考えてみて、「放浪記」の詩の投げやりさと同じ口調だから、それが座興の偽悪なのか、真実なのか、判断のつけようがない。「放浪記」にもつくり話が沢山あるだろうと思うが、その子供の話はひよつとすると真実であることもあり得る。というのは、世間では生れた子が男児ならば、親は女兒よりも引きとつて自分の子として育てる氣になることが多いものだからである。

ここで問題になるのは、キクさんが相手の麻太郎よりも十四歳も年上だということである。(キクさんは明治元年生れ、麻太郎は十五年生れ)後にキクさんが連れそつた沢井喜三郎は、二十歳年下の若者である。これものちにくわしく記すつもりだが、沢井は、麻太郎が若松で仏具店をはじめる前、門司にいた頃からの店員だった。のち、麻太郎が正妻となる芸者はまとなじんだのに絶望して、若松で彼と手をとつて彼女は、美美子さんをつれて駆落ちしたのである。

新潮社の年譜はその前に彼女は三度男と同棲し、二男一女をもつていたとしるしている。その一女というのが前記した某女であらう。この年譜によると、キクさんの前身はもつと複雑になつてくるが、私のしらべただけでも、十何歳年下の男性のあとで二十歳年下の男性と同棲して、男を叱咤し露店の車をひいたのである。その若さと体力の卓抜